

意味抽象性の異なる印象語を用いた色の印象評価と印象語対応色導出

1240333 高田 巴南 【 視覚・感性統合重点研究室 】

1 初めに

人が映画を見て感動したり、ネイルを見て可愛いと感じる場面で、色を変えて感じ方や与える印象を操作することもある。ホラー映画では暗い青色で恐怖を演出したり、同じ表情でも全体的に明るい色調にすると楽しそうなシーンになるのがその例である。色により与える印象は変化するが、色と印象の関連やその結びつきの強さには不明な点も多い [1]。

本研究では、印象を表現する意味語に適合する色はどの様に決まるのか、つまり色への直接的印象で直観的に決まるのか、各色の持つ「言語的な印象」で決まるのかの2つの仮説を検証するため、一対比較とSD法を用いた実験を行った。今回、特に色を表象する単語を先行研究 [1] での抽象意味語に加えている。意味語対応色導出法 [1] としての一対比較では、単語の表現する意味への適合度を直接的に比較評価している。SD法では、色の持つ固有印象から、意味語への適合度を判断して得点化している、と考えることになる。

2 実験手法

視力矯正を含む視覚正常の大学生10名(男性6名, 女性4名)が参加し、実験はそれぞれ3セッション行った。刺激色は、PCCS(日本色研配色体系)のvividトーンからv2~v24の12色と白(white), 灰(gray), 黒(black)を用いた。意味語は、元気な, 過激な, 重厚な, さびれた, 壮麗な, 繊細な, 清廉な, 長閑な, 明るい, 鮮やか, 赤っぽい, 緑っぽい, 黄色っぽい, 青っぽい, 暖かい, 柔らかい, 濁った, の計17語を用いた。SD法では、目立つを加え、緑っぽいと青っぽいでは行っていない。色の呈示は7.0 deg.(width) × 7.0 deg.(height)で行った。

2.1 一対比較

評価する意味語1つを画面提示した後、異なる2色の組合せ(15 × 14=210通り)を疑似ランダム順序で呈示し、よりその意味語を表している色1つを選択した。

2.2 セマンティック・ディファレンシャル(SD)法

色を1つ提示したのち、それぞれの意味語にどれほど当てはまるか、もっとも当てはまるを3、どちらとも言えないを0、全く当てはまらないを-3として7段階で得点評価してもらった。口頭で反対語を説明している。

3 実験結果

一対比較の結果を勝率としての修正選択率 [1] で数値化したデータとSD法の得点結果を主成分分析法により分析した。本稿では単語の分布結果のみを示す。図1に一対比較実験データに対して主成分分析を行った結果の

得点散布図を、図2にSD法実験データに対して主成分分析を行った結果の負荷量布置図を示す。

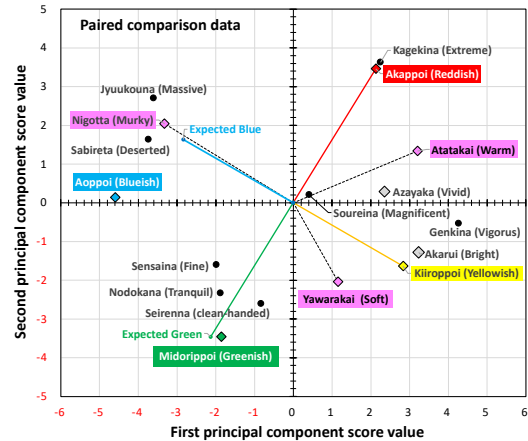


図1 一対比較実験の主成分得点散布図

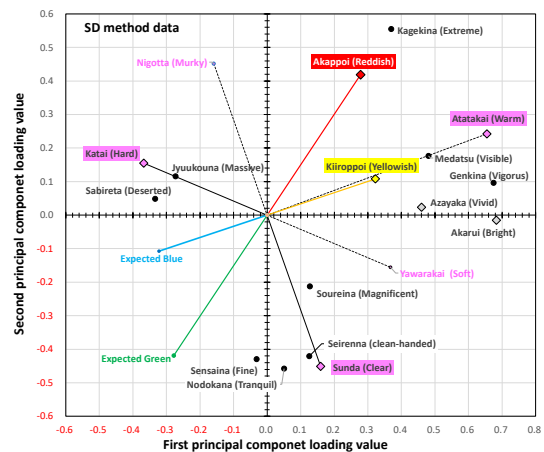


図2 SD法の負荷量布置図

異なる手法・実験であるにもかかわらず、色による評価による単語分布と、各色の評価で用いる単語分布が類似している。分布において反対色の赤と黄色の直交性、色表象のWarmとSoftの直交性が異なっており、色と意味語の関係性に、評価方向による差があると言える。

4 まとめ

本稿では意味語に適合する色と色の意味語による印象を双方向で調査した。その結果、全く異なる実験での色分布と単語分布のどちらも酷似した。色と印象には強い結びつきがある一方、印象を表現する意味語に適合する色は色への直感的印象で決まるものの、色の印象評価では言語的な印象が比較的強く影響すると考えられる。

参考文献

[1] K. Shinomori and H. Komatsu, "Semantic word impressions expressed by hue", J. Opt. Soc. Am., A, 35(4), pp.B55-B65, 2018.